

初めての高校での考査はどうだったろうか？おそらくその分量と難易度でびっくりしたのではないだろうか。でも、大丈夫。卒業まで何度も何度も試験はある。

学年通信の内容に相応しいかどうか、分からないけれども、ぜひ読んでもらいたい。ちなみに僕は1年B組の副担任で大佐賀美弦と言い、化学基礎を教えている。

「物」について考えてみた。きちんと調べて書いていることではないので、一部不正確な部分もあるが、それはご容赦願いたい。僕たちは(物)に囲まれて生活をしている。それは僕が小学生の頃から考えると想像もつかないような世界になってしまった。当時の未来の世界を描いた小説や漫画、テレビ番組でも想像出来なかった世界だ。簡単に振り返ってみたい。

我が家にテレビがやってきたのは、小学校の低学年だった。白黒テレビ、そのうちカラーテレビになりその色の鮮やかさで驚いた。チャンネルという円形のつまみがついていてそれを回すことによってテレビ局を選択した。時々映りが悪くなると、バシッと叩くと直った。テレビはよく叩かれていた。そのうち、リモコンが普通になり、チャンネルはテレビ本体から消えた。

中1の頃にラジカセ(ラジオ付きカセットレコーダー)を買ってもらった。ラジオ番組を聞くだけではなく、録音も出来、音のよいFM放送では曲を録音した。自分の声は、まるで自分ではないように聞こえて驚いた。高校でステレオセットを買い、レコードをよりよい音で聞いた。レコードを聴くときには、慎重に袋から出し、針をゆっくりと落として聞いた。あの落としてほんの少しの時間の緊張感とはまらない。ソニーからカセットウォークマンが出て、音楽は外で聴くものになった。やがてCD、MDと携帯を変えていったが、世紀が変わりアップルのiPodが音楽の聴き方を変え、曲の聴き方を変えた。

電話はどうだ。黒電話でダイヤルを回すものから、ボタンを押すタイプになり、コードレスになった。一家に一台しかなく、好きな子の家に電話を掛けるときはドキドキしたものだ。やがてポケットベルが女子高生の間で通信に使われるようになり、携帯電話、スマートフォンと進化していく。昔の漫画を見るとテレビ電話は登場していたが、電話単体である。それが今やどうだろう。僕はiPhoneを使っているが、電話機能ばかりではなく、メール、番組視聴、音楽を聴く、地図、メモ帳、その他様々な機能がついていて、ほんの少し前のコンピュータよりもものすごい性能である。昨年アメリカ旅行をしたとき、フロリダからスカイプで教え子達の同窓会に参加したり、LINEを使ってサンディエゴから進路相談にのった。

紙幅がないので、詳細な検討は省くがインターネットという発明(発見)が世の中の動きを根本的に変えてしまった。その中で僕たちは否が応でも生活をしなければならぬ。情報を得る手段は集団から個に移ってしまった。人間の思考のあり方はどうなってしまうのか？僕は授業では基本的に白色と黄色のチョークで進める。沢山の質問をし、思考を整理し、理解を促すような流れが最近では通じなくなってきた気がする。思考の溜(ため)がないのだ。新しい文明の波が押し寄せてきた時に同じようなことが繰り返されてきた。「今の若者たちは、・・・」でもいいだろう。しかし、今回の波は一部の物を考える「エリート」と何も考えなくても何とかなるという「一般人」に大きく乖離していくような気がする。僕はJR通勤をしているが、昨日乗った時の車両はほぼ全員がスマートフォンの画面に見入っていた。ぞっとした。

ここである人の文章を読んでもらおう。タイトルは『「知る」ということ』。

何かを知っているということは、どういうことか。

たとえば私は、「今ここで雨が降っている」ということを知っている。そのとき私が知っていることの内容、つまり「今ここで雨が降っている」という文の意味は、はっきりしている。しかし、「今日は嫌な天気だ」といえば、その意味ははっきりしない。どういう天気が嫌な天気か。雨が嫌でないこともあるだろうし、日照りが嫌なこともあるだろう。意味のはっきりしないことは、知っているのでもないし、知らないのでもない。私は窓を開けて雨をみているのだから、「今ここで雨が降っている」ことは、確かである。それにくらべれば、「明日は雨がやむでしょう」と天気予報がいうのは、確かではない。予報は当たらないかもしれない。確かでないことを、知っているとはいえないだろう。

たとえば、「富士山は日本で一番高い山である」とか、「富士山は世界で一番高い山である」という文は、どちらも意味ははっきりしているばかりでなく、ほんとうか、うそか、どちらかである。前の文はほんとうであり、あとの文はうそである。しかしまた、ほんとうでも、うそでもない文がある。たとえば、「富士山は美しい」という文があるとして、富士山は美しくみえるときもあり、そうでないときもあるだろう。ある人には美しく見え、ほかの人には美しくみえないし、「ほんとう」でも「うそ」でもないことを、知っているとはいえない。「今ここで雨が降っている」ということを私が知っているのは、それが「ほんとう」だからである。

要するに、意味のはっきりした文があって、その文のほんとうであることが、私にとって確かなときに、またそのときのみ、私はその文の内容を知っている、ということが出来る。したがって、「知る」ということは、「感じる」とも、「望む」とも、「信じる」とも、ちがう。「今日は嫌な天気だ」と私は「感じる」ので、「知る」のではない。天気の話として、その文ははっきりしていないからである。「明日は雨がやむでしょう」は、確かでないから、私が「知っている」ことではなくて、明日遠足に出かけたいと思っている私が「望む」ことである。「遠足は健康のためによろしい」は、よほど長い時間をかけなければ、ほんとうかうそ確かめようがない。それは、私が「知る」ことではなくて、「信じる」ことである。

どうすれば知ることができるか。

「今ここで雨が降っている」は、現在のことで、確かである。「昨日も雨が降っていた」は、近い過去のことで、これも確かである。しかし、「一年前の今頃も雨が降っていた」は、遠い過去のことで、必ずしも確かではないだろう。朝から降り続く雨を今私がみているとして、近い未来、たとえば、「三分後にも雨が降っているだろう」というのは、ほとんど確かなことである。しかし遠い未来、たとえば「明日の今頃降っている」かどうかは、確かでない、つまり知ることができない。

遠い過去や遠い未来のことを、私は知らない。しかし、現在目の前で起こっていることは、たしかに知っている。また近い過去や近い未来のことも、ほとんどたしかに知っている。近い過去のことを知っているのは、よく覚えているからである。近い未来のことを、ほとんどたしかに知っているのは、なぜだろうか。過去にたびたびくり返されてきたことは、少なくとも近い未来にくり返されるだろう、と考えても、間違ふことが少ないからである。そう考えるのは、物事がでたらめに起こるのではなく、ある規則に従って起こる・・・つまり世界に規則性がある、と考えるのと同じことである。今まで太陽はいつも東から上って、一度も西から上らなかつたから、明日の朝も太陽は東から上るだろう、と私は考える。車のブレーキをふむと、いつも車が止まったから、私は赤信号をみて、ブレーキをふむ。そのとき私は、極めて近い未来に車が止まるだろうことを知っている。しかし、車のブレーキをふむたびに、私は過去にブレーキをふむとどうなったかを、想出しているわけではない。過去にたびたびブレーキをふんだことから、私はブレーキをふむことと車が止まることの間、ある規則を認め、その規則・・・ふめば止まるという規則・・・から、未来を知るのである。ある種類の規則は、極めて近い未来ばかりでなく、かなり遠い未来にも通用する。明日の朝だけでなく、10年後にも、100年後にも、太陽は東から上るだろう、ということ、ほとんどたしかに私が知っているのは、私の人生で太陽がいつも東から上ったからではなく、太陽が東から上る、という規則を私は知っているからである。

どうすれば、規則を知ることができるだろうか。たとえば、「この薬を飲めば、この病が治るだろう」という規則を知るために、科学者がするのは、次のようなことである。まず同じ病の動物を集めて、二組に分け、その一方には、薬を与え、他方には、与えない。二組の動物は、薬のほかのこと（たとえば温度や栄養など）については、なるべく同じ条件におく。そのとき、薬組の動物の10分の9の病が治り、薬なしの組の10分の9の病が治らなかつたならば、その薬は病を治すのに役立った、と考える。実験のやり方は誰にもわかるようになっていて、誰が何度同じ実験をくり返しても同じ結果が出る時科学者たちは、「その薬を飲めば、その病が治る」という規則を知るのである。この実験で大切なことは、薬をやった組（それを実験群という）ばかりでなく、薬なしの組（それを対照群という）を調べることである。薬を与えたら病が治った、ということだけからは、薬をあたえたから病が治った、と結論することはできない。対照群をみなければ、薬をあたえなくても病が治ったかもしれない、という可能性を否定できないからである。したがって、たとえば「長生きをする薬」を見つけることは難しい。たとえ薬を飲んだ人たちを何十年もみまもることができたとしても、薬のほかの条件が何十年の間その人たちと同じであるような対照群は、ほとんどあり得ないからである。薬ではなくて、たとえば、「長生きをする体操」でも同じことである。その体操をした人たちが長生きをしても、長生きが体操のためであるかどうかは、わからない。

「これだからあれ（たとえば「薬を飲んだから治った」）という形であらわせる規則を知るためには、三つのことを確かめればよい。第一、これがあれよりも先に起こること。第二、これならばあれ（実験群）、第三、これでなければあれでないということ（対照群）である。

その三つのことのどれか一つでも確かめることができなければ、そういう規則を知ることはできないのである。

知りたいことを知り得ること。

知りたいことを知ることができるとはかぎらない。たとえば、ある番号のくじが当たるか当たらないかは、誰でも知りたいことだろうが、誰も知ることができない。また、知ることができて知りたくないこともある。たとえば、日食がいつ起こるかは、たしかに知ることのできる未来の出来事の一つである。しかしそれは人の生活に少しも係わりがないから、それがいつ起こるかを知りたいと思わない人が多いだろう。もちろん、知りたくもないし、知ることもできない物事も、世のなかにはたくさんある。しかし、知りたくないことは、知ることができても、できなくても、どちらでもよいだろう。

私は、私が知りたことなかで、知り得ることと知り得ないことを区別し、知り得ることについては、それを知るためにやらなければならないことをやる。知り得ないことについては、あきらめる。私は今出かける前に、雨が降っているかどうかを知りたい。それを知るために私のやることは、窓を開けて、外をみることである。私はまた、これから会いにゆく人といっしょに暮らして、長く幸福であるだろうか、ということも知りたい、と思う。しかしそれは、くじの当たり番号のようなものである。遠い先の知り得ないことを知ろうとしてむだな努力をするよりも、私は現在と近い未来のことを考えるだろう。

知りたくて知り得ないことはたくさんある。それでも、私が「望む」ことは、私が「知る」ことの代わりにはならない。それは二つの別のことである。またほかの人のいうことは、そのまま私が知っていることではない。

人は誰でもうそをつくことがある。だまされたくないならば、私は、みづから知っていることと知らないこと、知り得ることと知り得ないことを、はっきり区別するほかはないのである。

出典：教育出版 昭和61年度版小学6年生国語教科書 加藤周一

## 今後の予定

6/19 (火) ~ 20 (水) 球技大会